

オランダ、アムステルダムを中心に位置するレンブラント・ハウス美術館は、レンブラントが1639年から1658年にかけて実際に暮らした家を利用した、世界で唯一のレンブラント専門の美術館です。レンブラントによるエッチング（腐蝕銅版画）の世界有数のコレクションを中心に、同じく素描作品、さらに彼と関連の深い、あるいは、その強い影響を受けた芸術家たちの作品を収蔵しています。一方、国立西洋美術館でも、レンブラントのエッチングを重点的な収集の対象としており、《病人たちを癒すキリスト》や《三本の木》など代表作を含む、20点余の作品を所蔵しています。

今回の展覧会は、この2つのコレクションを組み合わせ、国内の美術館、大学図書館および海外の個人コレクターから拝借した作品や書籍も加えて、レンブラントのエッチングと、それが同時代および続く時代に与えた影響を見ていく企画です。

展覧会の前半では、まずレンブラントのエッチングに焦点をあてます。彼は当時、先例より刺激を受けつつ、さまざまな実験的な試みを通してエッチング表現の可能性を追究し、その地平を拓きました。そうして生み出された諸作品は、数世紀にわたって芸術家たちに影響を与え続けます。とくに、19世紀には、エッチング技法そのものの再評価と結びつき、レンブラントのエッチングへの関心は熱狂的な高まりをみせました。展覧会の後半では、そうした事例を、版画のみならず文学や批評なども交えてご紹介します。



レンブラント・ハウス美術館外観

1. 「油彩以上に色彩豊か」（詩人・批評家テオフィル・ゴーティエ [1811-1872]）とも言わしめた、レンブラント版画の魅力をたっぷり紹介。版画表現の可能性を拓いたレンブラントの“挑戦”をご覧ください。
2. ゴヤ、ホイッスラー、ルドン、マティス、ピカソ・・・レンブラントに憧れた巨匠たちの作品も紹介。版画史におけるレンブラントの“インパクト”にも注目した大規模展覧会は国内初。
3. アムステルダムのレンブラント・ハウス美術館と国立西洋美術館による共同企画。両館が誇るコレクションを中心に個人蔵も加えた約130点を一挙展示します。

第1章は、レンブラントのエッチングをテーマとします。レンブラントが制作に着手した17世紀初頭、エッチングは歴史的な転換期を迎えていました。以前のエッチングは主として、銅板に直接線を刻んで版を作るエンブレイヴィングの代替技法であり、その規則正しい線描の再現が重視されました。ところが17世紀初頭、エッチング制作に参入したオランダの作家たちは、同技法ならではの表現を追求し始めます。レンブラントもこの動きに加わり、やがて牽引者として、エッチング技法の表現の可能性を拓いていきました。

レンブラントはまた、エッチングにおける主題の選択や、その表現方法においても、さまざまな探求を重ねました。それは、彼が作品で取り上げた主題の幅広さや、それらへの多彩なアプローチに見て取ることができます。

以上のようなレンブラントのエッチングにおける挑戦は、ときに純粹に芸術的な関心に基づき、ときに商業的な動機に支えられたものでした。また、先進的で実験的な試みを繰り返したレンブラントが、過去の巨匠や同時代の作家たちの仕事にも深い関心を寄せ、そこから刺激を受けていたことも忘れてはなりません。本章では、こうしたレンブラントのエッチング制作を「肖像と頭部習作」、「無宿者と市井の人々」、「キリスト教主題」、「スケッチ」、「風景」の主題別5セクションに基づいて見ていきます。

レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
(レイデン、1606—アムステルダム、1669年)

レンブラントは、レイデンの裕福な製粉業者の家に生まれたものの、画家を志し、アムステルダムで有力画家ピーテル・ラストマンに学びました。修業後はレイデンで数年間、兄弟子ヤン・リーフェンスと工房を共有しますが、1631年にアムステルダムに戻り、肖像画家、物語画家として地位を築きます。しかし代表作《夜警》(アムステルダム国立美術館[アムステルダム市より寄託])を完成させた1642年以降、妻との死別や破産等、私生活上の不幸をたびたび経験します。また晩年に向かうにつれ、画風が時代の趣味と乖離していく憂き目にも見舞われました。浮き沈みのある人生の中で、絵画制作はしばしば停滞を見せますが、そのあいだもエッチング制作は継続されました。旺盛な実験精神のもと、膨大な数の作品の中でさまざまな表現を試み、それらは同時代、さらに後世の芸術家たちをも感化し続けることとなります。



レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《驚いた表情の自画像》1630年

エッチング、ドライポイント
レンブラント・ハウス美術館

エッチング制作を始めた当初のレンブラントは、多くの自画像を制作しました。その主要な目的のひとつは、表情の習作だったと考えられます。本作品は、唇をすぼめ、目を大きく見開いた驚きの表情を描いたもので、恐怖ないし感嘆を含む複雑な心理状態が雄弁にとらえられています。瞳の部分のハイライトは、生き生きとした印象をもたらし、表現にいっそうの説得力を与えています。



レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《エジプトへの逃避》1645年
エッチング、ドライポイント
レンブラント・ハウス美術館

レンブラントは実験的精神に富んだ芸術家であり、エッチングにおいても様々な表現を試みました。聖家族のエジプト逃避を主題とした2点の作品のうち、1645年の作品では、ごく淡いスケッチ風の線描で画面を構成しています。一方、1651年の作品では、無数の線を重ねて、深い夜の闇を表現しています。



レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《夜間のエジプトへの逃避》1651年
エッチング、ビュラン、ドライポイント
レンブラント・ハウス美術館

豊かな階調に注目！ ➡

レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《イタリア風景の中の聖ヒエロニムス》1653年頃
エッチング、ドライポイント/和紙
レンブラント・ハウス美術館





レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《病人たちを癒すキリスト》1649年頃
エッチング、ドライポイント、ビュラン／和紙
国立西洋美術館

『マタイによる福音書』19章に記された複数のエピソード——病人の癒し、パリサイ人たちとの論争、子どもたちの祝福、富める若者への譴責——を、厳かに光を放つキリストを中心に、ひとつの画面の中で同時進行的に描いています。緻密に重ねた線の集積が生み出した柔らかく深い闇が支配する画面右側と、まるで白描のような趣の画面左側。この2つが共存する本作品は、エッチングが持つ表現の可能性が最大限まで追究された、レンブラントの手になるものにとどまらず、エッチング史においても屈指の傑作となっています。

↑エッチングの歴史に残る傑作



レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《アムステルダム眺望》1641年頃
エッチング
レンブラント・ハウス美術館

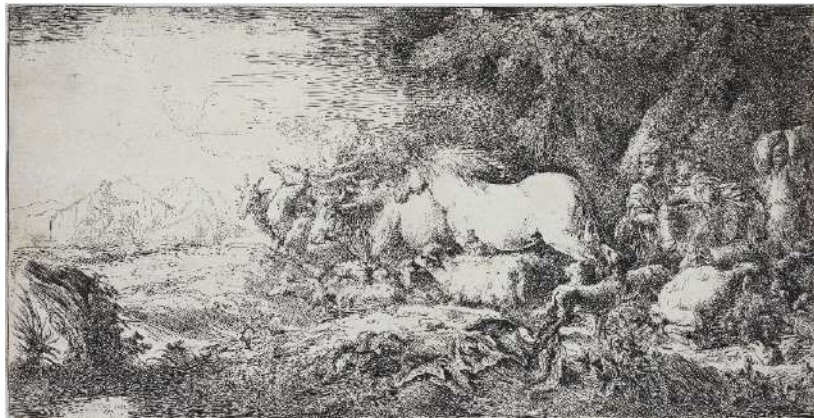


レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《旅回りの楽師たち》1635年頃
エッチング
レンブラント・ハウス美術館

第2-3章では、レンブラントの版画が後世に与えた影響を見ていきます。第2章ではまず、17-18世紀の事例に注目します。

レンブラントの版画は、制作当時より高い人気を博しましたが、17世紀におけるその影響の広がりには限定的でした。彼の弟子たちの中でも、エッチング制作に取り組んだのは、フェルディナンド・ボルら少数に留まります。もっとも、限定的な影響の広がりの中でも、イタリアのジョヴァンニ・ベネデット・カスティリオーネやステファノ・デッラ・ベッラの例のように、レンブラントのエッチングに創造的に感化を受けた作品も生み出されました。

続く18世紀には、ドイツの芸術家たちを中心に、レンブラントのエッチングへの関心が高まります。数多くの模倣作が制作されたほか、レンブラントが未完で残した作品に手を入れて、「完成」させる動きも見られました。さらに、レンブラントのエッチングは、美術愛好家たちによっても熱心に収集され、今日のレンブラント研究につながるカタログ・レゾネ（全作品目録）の編纂も始まります。



ジョヴァンニ・ベネデット・カスティリオーネ
《箱舟に入る動物たち》1650-55年
エッチング 国立西洋美術館



ステファノ・デッラ・ベッラ
『素描の法則』(23):
《ターバンをかぶった男性の頭部習作》
1641年 エッチング 国立西洋美術館



レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《窓辺でエッチングを制作する自画像》
1648年
エッチング、ドライポイント
レンブラント・ハウス美術館



ゲオルク・フリードリヒ・シュミット
《窓辺で素描する自画像》
1758年
エッチング、ドライポイント
レンブラント・ハウス美術館

← 国境を超える
レンブラント・インパクト!

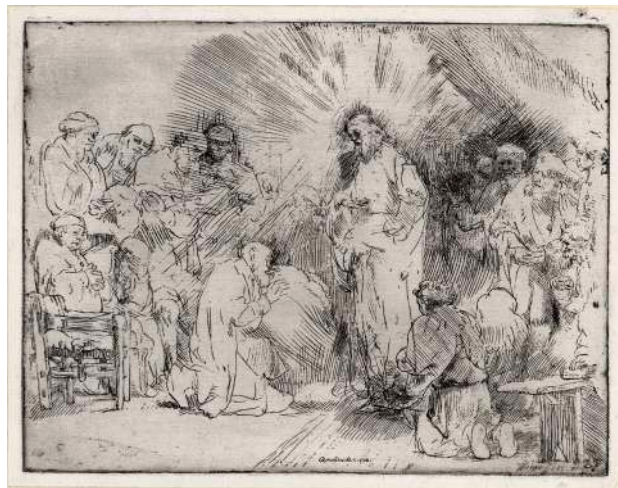
シュミットは、エングレーヴィングによる肖像画の複製において高く評価されたドイツの作家です。キャリアの後半には、レンブラント風のエッチングを多く手掛けるようになり、《窓辺で素描する自画像》は、その代表作に数えられます。

レンブラントによる1648年の自画像をそれと分かるかたちで土台にしつつ、人物の視線の向きを変え、窓ガラスの蜘蛛の巣、背景の楽器と剣を描き加えるなど、独自の趣向も取り入れた作品に仕上げています。

最終章は、19-20世紀におけるレンブラントのエッチングの影響を見ていきます。

最初に注目するのは、ゴヤの作品です。ゴヤはスペイン国内におけるレンブラントのエッチングを熱心に研究し、受けた刺激を自作に反映させました。続いて、19世紀フランスを中心としたエッチング復興^{リヴアイヴァル}の文脈における、レンブラント人気の興隆に焦点をあてます。同世紀初頭のフランスでは、エッチングに対する関心は下火となっていました。が、芸術家の感性やオリジナリティーを重視する思潮のもと、その線描の自由度の高さ—手の動きのまま作者の内面を率直に表現できると考えられた—が注目され、その再評価が進みます。芸術家のほか文学者や批評家も参加し、1862年の腐蝕銅版画協会設立でクライマックスを迎えたこの動きにおいて、理想の体現者とみなされたのがレンブラントでした。

一方、後半では、レンブラントのエッチングの直接的、間接的な影響のもと、制作された作品群を紹介します。その中には、ステートを重ねつつ図像を発展させた、あるいはドライポイントの滲みの効果を表現に生かした—どちらもレンブラントが可能性を試みた手法です—フェリックス・ビュオやメアリー・カサットの作品も含まれます。また、アンリ・マティスの作品は、レンブラントの《窓辺でエッチングを制作する自画像》（作品画像6、9ページ）からの直接的な引用を通して、17世紀の巨匠に対する敬意を表しています。



レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン

《使徒たちに現れるキリスト》1656年

エッチング

レンブラント・ハウス美術館

ゴヤも憧れた巨匠

ゴヤが活動した18世紀末から19世紀初頭のスペインで、レンブラントの版画はさほど知られていませんでしたが、彼は友人のコレクション等を通してそれらに親しんだと考えられます。ゴヤの作品には、しばしばレンブラントの版画からの着想が投影されています。「真理」の死（王政復古による「憲法の自由」の死の暗喩）を表した本作品もその一例で、構図やまばゆい光線の表現には、レンブラントの《使徒たちに現れるキリスト》とのつながりが見取れます。



フランシスコ・ホセ・デ・ゴヤ・イ・ルシエンテス

《戦争の惨禍》79番：《真理は死んだ》1810-20年頃

エッチング、バーニッシャー／ウォーヴ紙

国立西洋美術館



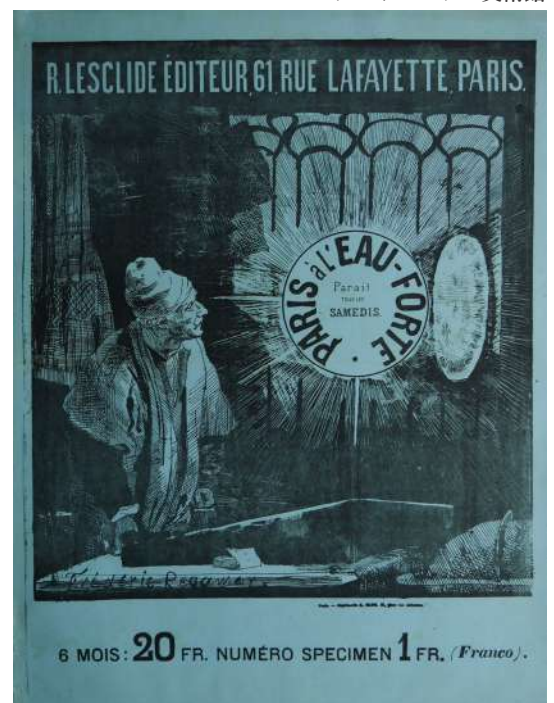
レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《書齋の学者（またはファウスト）》1652年頃
エッチング、ドライポイント、ビュラン
国立西洋美術館

《書齋の学者（またはファウスト）》は、レンブラントによる最も謎めいた作品のひとつです。現在では、『コリントの使徒への手紙Ⅰ』に基づいて信仰の寓意が表されているという説が最も有力です。一方、19世紀には、この世のすべてを見極めたいという欲求から悪魔との取引すら厭わなかったファウストが、魔術に没頭する姿を描いたものと考えられていました。作品の謎めいた雰囲気は当時の人々の心をとらえ、さらにレンブラントのエッチングの代表例として、同技法の再評価を目指す作家たちによって称揚されました。エッチングの普及と地位向上を目指す『エッチングのバリ』誌の宣伝のために制作されたレガメーのポスターは、そうした動きを結晶化させたものと言えるでしょう。

エッチング・リヴァイヴァルの象徴！ ➡

フレデリック・レガメー
《『エッチングのバリ』誌ポスター》

1876年
リトグラフ／青色紙
レンブラント・ハウス美術館





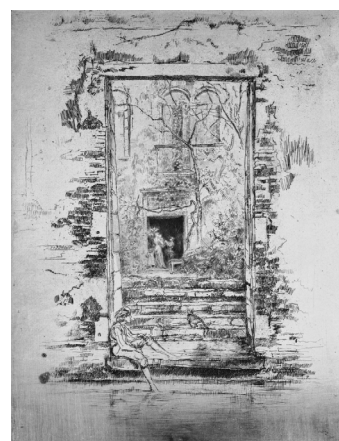
レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《三本の木》1643年
エッチング、ドライポイント、ビュラン 国立西洋美術館



アルフォンス・ルグロ
《嵐の川景色》1857年
ドライポイント レンブラント・ハウス美術館



フェリックス・ビュオ
《ウェストミンスター・ブリッジ》1884年頃
エッチング、ドライポイント、ルーレット 国立西洋美術館



ジェイムス・マクニール・ホイッスラー
《庭》1880年
エッチング 国立西洋美術館



レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン
《窓辺でエッチングを制作する自画像》
1648年
エッチング、ドライポイント
レンブラント・ハウス美術館
※2章にて展示



アンリ・マティス
《版画を彫るアンリ・マティス》1900/03年
ドライポイント 国立西洋美術館

レンブラントへの敬意 ↑

開催概要

展覧会名 和 | 版画家レンブラント 挑戦、継承、インパクト
英 | Rembrandt the Etcher: His Challenges and His Impact

会場 国立西洋美術館 企画展示室
〒110-0007
東京都台東区上野公園 7 番 7 号



会期 2026 年 7 月 7 日 [火] — 9 月 23 日 [水・祝]
開館時間 9:30~17:30 (毎週金・土曜日は 20:00 まで) ※入館は閉館の 30 分前まで
主催 国立西洋美術館、レンブラント・ハウス美術館
助成 国立西洋美術館柴原慶一基金
協力 西洋美術振興財団
お問い合わせ 050-5541-8600 (ハローダイヤル)
国立西洋美術館公式サイト <https://www.nmwa.go.jp/>
国立西洋美術館 SNS X | @NMWATokyo Facebook | @NationalMuseumofWesternArt
Instagram | @NMWATokyo YouTube | @NMWATokyo

広報画像

以下の URL/二次元コードよりダウンロードいただけます。
※初回のみユーザー登録が必要
<https://service.press-camp.jp/pcamp/event/679>



報道関係のお問合せ

「版画家レンブラント」広報事務局 (ユース・プランニング センター内)
担当 | 大山、片山、池袋
〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町 9-8 KN 渋谷 3 ビル 4F
TEL | 03-6821-8229 FAX | 03-6821-8869
E-mail | rembrandt2026@ypcpr.com